

■ 市長から市民のみなさんへ

山陽小野田市長
白井 巧文



■ 全国新酒鑑評会

今年5月20日、独立行政法人酒類総合研究所と日本酒造組合中央会は合同で、平成25年度に全国で造られた新酒の中から、入賞酒と金賞酒を発表しました。入賞酒目録によると、入賞酒とは、「優秀と認められたもの」、金賞酒とは、「入賞酒の中で特に優秀と認められたもの」だそうです。

山口県にもたくさんの酒造所があり、多くの新酒が挑戦したようですが、入賞酒は8銘柄、金賞酒は、そのうち3銘柄にとどまりました。しかし、厚狭の永山酒造合名会社の「山猿」も堂々金賞酒に名を連ねていて、入賞酒目録を見ながら大変誇らしく思いました。

受賞の報告に市役所に来てくれた蔵元によると、酒のうまさは、大半、米の質で決まるとか。「いい米を作ってくれる農家のおかげです」と頭を下げていました。今、はやりの言葉でいうと、コラボの成果とでもいうのでしょうか。



■ 男女共同参画

政府は、女性の社会進出を重要な政策課題に掲げ、官庁や事業所での「女性管理職の割合を30%以上」にすることを求めています。本市について調べたところ、女性管理職は全体で16.7%、市長部局では17.6%という結果でした。50歳代になると、女性の職員数が激減します。その原因は、かつての小野田市当時、13年間にわたり女性の新規採用がなかったためだそうです。今では信じ難いことですが、そんな時代もあったのですね。

安倍総理は、最近では女性管理職の比率だけでなく、国家公務員上級職に占める女性の割合も問題視されています。ポジティブ・アクション（女性や障がい者、マイノリティーに対する差別をなくすための積極的な取り組み）を提起されているようにも見えます。数年前、九州大学理学部数学科では女性の数学研究者を増やすため、入試の際に女性枠を設けることを発表しましたが、世論の反対にあい撤回しました。女性には出産、育児のほか、家事全般にわたる負担が重くのしかかり、妻は別称「家内」と言われてきたのが、発展途上国「日本」の実情でした。男女共同参画社会の実現に向けて、女性の社会進出を促進するには、ポジティブ・アクションとしての「女性枠」の必要を痛感しますが、みなさんはいかがですか。